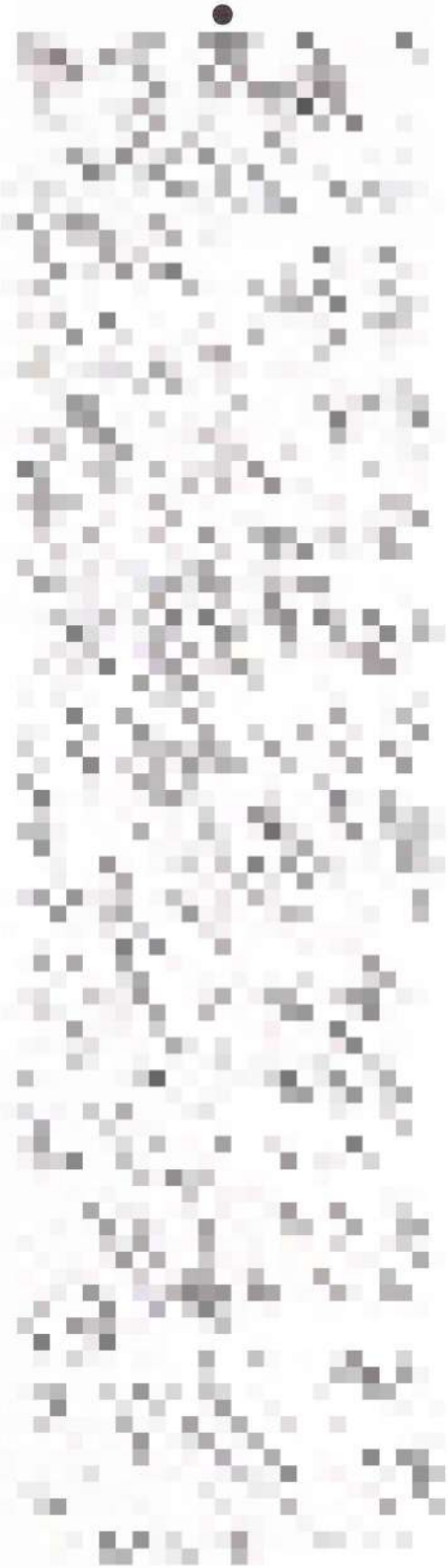
Scramble Shot

Concert バーンスタインに捧げられたバイエルン放送合唱団の定期演奏会

バーンスタイン生誕100周年記念コンサートは日本国内外でたくさん企画されているが、彼から「世界で一番好きな合唱団」という賛辞を贈られたバイエルン放送合唱団では、バーンスタイン自身の曲や、彼とつながりのある作曲家の合唱曲を集めたプログラムで構成された、5月12日の定期演奏会をバーンスタインに捧げた。

カウンターテナー若手最注目株のヴァレル・サヴァドゥスのソロが光った「ミサ曲」、師弟関係のような友情を深めたアーロン・コープランド「4つのモテット」、バーンスタインが「交響曲第2番《不安の時代》」をようやく初演して以来、信頼を寄せていたチャールズ・アイヴズ《詩編第67番》、《第100番》、そして、「アメリカ人の告別曲」ともいえるサミュエル・バーバー「アニュス・デイ」でしんみりと休憩に入った。

後半は、当合唱団とバーンスタインの最後の共演となったモーツァルト《アヴェ・ヴェルム・コルプス》で始まり、エリック・ウィテカー《スリープ》で若い世代に受け継がれたバーンスタインのDNAを楽しんだ後、バーバー《生まれ変わり》、最後にバーンスタイン《チチェスター詩編》で幕を閉じた。14歳のボーイ・メゾソプラノの声が2度掠れたが、ソプラノの合田昌子らのソリストも活躍した合唱団の柔らかな声が優しく包み込んだ。当合唱団デビューとなったオランダ人指揮者クラース・ストックの下、「自分の表現したいことを頭に浮かべるだけで実現させてくれる合唱団」とバーンスタインに言わしめた当合唱団の実力が発揮されていた。

（中 東生）

右はいま注目のカウンターテナー、サヴァドゥス